

夏合宿報告書

NO. 2

1969

東京電機大学ワンダーフォーゲル部

B パーティ

(メンバー)

P. L	大 館 康一	3 A
S. L	片 山 正則	3 E
	石 原 正男	3 S
	石 川 悟	2 D
	木 村 千歳	2 C
	深 川 高年	1 A
	川 田 和正	1 B
	井 田 栄治	1 C
	嶋 村 誠二	4 S

○ コース予定表

- 7/23 上野 鳴海3号 (22:34発) 9番線
- 7/24 温海(7:15着) Buss 関川 —— 清水場 (T. S)
- 7/25 T. S —— 摩耶山 —— 倉沢 —— 上田沢 —— 大鳥
(T. S)
- 7/26 T. S —— 西洲小屋 —— 泡滝峠 —— 大鳥池 (T. S)
- 7/28 停滞
- 7/29 T. S —— 寒江山 —— 竜門山 —— 趣朝日岳 —— 大
朝日岳 (T. S)
- 7/30 T. S —— 平岩山 —— 北大玉山 —— 角楡小屋
(T. S)
- 7/31 T. S —— 大石橋 —— 針生平 —— 徳綱 —— 五味沢
—— 荒沢 (T. S)
- 8/1 停滞
- 8/2 T. S —— 大栗田 —— 門前 —— 小豆川 —— 福田
—— 耕崎沢決 (T. S)

8/5 予備日

8/6 予備日

8/7 解散

○ 行動記録

7月23日 上野 ~~14:00~~

我がパーティはコースの関係上、他の三隊とは別に上越線回りで行く事になる。列車は16:34発臨時急行鳥海3号を使用する。我々は他のパーティより1時間ほど出発が早い為に、ACD隊全員が見送りに来てくれ、やっとこれから夏合宿が始まるのだと言う気構えを持たせてくれた。

7月24日

~~14:00~~ 鶴岡 ~~2:15~~ 大島 ~~2:15~~ 血淵小屋跡

予定通り鶴岡に到着し、バス待合所にてバスの出発を待つ。登山客は見た所我々だけの様だ。2時間で大島に着く。そこにて関東学院大Wに合う。昼食をとりすぐさま出発する。曇り空であるが、意外に蒸し暑い。その為か早くもバテ始める者が出る。道は自動車道であるので別に問題はなく、14:00にはT、Sに着き、明日から入る登山道の入口をも確認しておいた。

7月25日

T、S ~~3:36~~ 大鳥池

T、Sから25分ほどで朝日岳縦走登山口と書かれた道標に合う。そこより登り坂になり、ようやく登山道らしくなる。道はハッキリしているし、それほど急な登り坂もない。だがまだ体が慣れていない為か、バテる者が出、先頭よりかなり遅れ始める。その為、その者に4年生1人を付け、他の者達を先きに行かせる。大鳥池の手前にはかなりの登りがあるが、そう長くはかからない。T、Sは大鳥池の水門の近くに張る。水は水門の向い側と1518mへの分枝附近に湧き、水があるのでそれを使用する。水門附近の水場はわかりにくい。

7月 26 日

T S $\xrightarrow{3:07}$ 以東岳 $\xrightarrow{1:22}$ 孤穴小屋 (T S) $\longleftrightarrow$ 善六の池

この日は合宿中で一番きついコースと思われる為、早目にT Sを出発する。以東岳の登り附近から、かなりの急坂になり、30分、5分のペースで進む。その為割合スムーズに事が進む。

以東岳の中腹あたりからは深い霧におおわれ、20m先が見えないほどであった。この頃より森林限界を越え、草原状となり、雪渓も現われ始める。山形県観光課で発行している五万の修整地図の水場も確認する。

以東岳山頂には、コンクリートで出来た避難小屋があり、10名近くは収容できる。以東岳の下りあたりから他のパーティに会い始めたが、すれちがいであり、我々と同方向の者達は見かけない。

11:30予定のT Sに着く。意外に順調についたのに驚く。その為、時間的にかなりの余裕が出たので、明日C隊が停滞すると言う善六の池まで全員で偵察に行く。T Sからそこまでは、片道30分とはかからない。停滞には良さそうな所であるが、水は雪渓のたまり水で、あまりきれいとは言えない。

この道に入ってから急に道巾が狭くなり、あまり人が入っていない事を感じさせる。

7月 27 日

T, S $\xrightarrow{1:30}$ 北寒江山 $\xrightarrow{1:15}$ 竜門山 $\xrightarrow{1:15}$ 西朝日岳 $\xrightarrow{1:00}$ 金玉水

朝方2時頃より強風を伴った雨となる。4時起床して、しばらく様子を見る。6時半雨が止み出発する事に決める。視界は15m位、丁度我々と同じく待機していた他のパーティ達も出発の準備を始める。

大多數のパーティが大鳥に下る者達で、大朝日岳に向うのは我々と天理大WVのパーティだけの様であった。天理大のパーティは金玉水まで追いつ追われつ行動を共にする。

視界はまったく開けないうが、道はハッキリしている為、別に戸惑う所はなく順調に進む。途中、新潟大WV部の者より「C隊は金玉水にて停滞

する。」との連絡が入る。

金玉水ではC隊が出迎えてくれる。全員無事を聞いて安心する。

夕方、大朝日岳山頂に登り、飯豊にトランシーバーで送信したが受信できず、あきらめて下山する。この頃より霧雨がひどく、ときたま強風が吹くので非常の事も考え朝日小屋と避難小屋の状態を見ておく。

朝日小屋では、前日からの登山客がいて満員であり、避難小屋にもノパーティ入っていた。TSより小屋までは5分位であり、小屋より山頂までは5分位である。

ク月之八日

(停滞)

予定通りの停滞ではあるが、天候は昨日よりかなりひどく、ときたま強風を伴った雨となる。その為出発するはずだったC隊も、あきらめた様子。

天理大は朝方テントが飛ばされた様で避難小屋に逃げていった。

視界は昨日と同じ位。ついで8時頃C隊のテントもポールが折れ使用出来なくなり避難小屋に逃げると言う。個人装備のみを運び、テントは晴れ間を見はからってから取りに来た。その際、避難小屋の状態を聞いておき、最悪の場合は我々も避難する事をつける。

そしてその頃から我々のテントも危なくなってきたので、C隊の装備を借り補強に努める。しばらくして余りに風雨がひどいので、我々のパーティも撤退する事を考え、いつでも撤退できる状態にしておく。

しかしながら、C隊のトランシーバー受信により避難小屋も満員である事を聞く。そして、その日はとうとう撤退しそびれてしまった。夜10時の気象では、当分の間晴れる見込みはつきそうもなく、又天気予報では大雨注意報が大雨洪水注意報へと変わっていた。

7月29日

(停滞)

夜、ものすごい強風で雨が降り、テントの中にもかなりの水が入ってきた。皆なも余り眠れそうにないらしい。シュラフが濡れてきた為か寒さを感じる。ラジウスをつけ、体を温める。撤退したいが、この暗さのもとでは危険であるので、朝方明るくなるまで待つ事にする。

4時半頃より、あたりが明るくなってきたが、風雨が前にも増して激しくなってきた為、もうしばらく待つ事にする。

5時近くなり、とうとうテントがやぶけてしまい、これをきっかけに撤退する。装備類は天気が治まってから取りにくる事にし、ひとまず空身で避難小屋に逃る。幸いにも避難小屋では、他のパーティが少し前に出ていったとの事でC隊のみであり、我々の余地も十分にあった。

避難小屋といっても、雨漏りのするひどい小屋であるが、風雨は十分とけられる。我々B隊は空身の上濡れた衣服なので、C隊の者達より乾いた衣服を借用する。この小屋附近では、TSの場所とちがって風は余りなく、又ちょっと外に出ただけでは尾根筋の状態などわからない為か、C隊はこれより予定のコースを取るという。

尾根の激しい風雨状態を知っている我々はそれを止める。そして7時半、装備類を取りにもどる。その際、ナベ、食器、その他多数の物を風により飛ばされる。シュラフはもう完全に濡れてしまい、手の付けられない状態となる。だが、衣服類は幸いにも濡れずにすんだ。

夕方、飯豊と通信する為に出かけたが受信できず。

その日、B、C隊寄りそってC隊のシュラフを上からかけて眠る。

7月30日

(B隊、C隊合同記録)

TS 6.07 大朝日岳山頂 —— 沢出合 —— 朝日鉱泉

(実動時間24分)

この先、全然晴れるめどがつかず、又石油が尽細くなり、B隊のシュ

ラフも濡れ

を変え、左

これより

の道はニ

ースであ

え、後者た

ので前者を

ってきた。

為、トラ

訓合スム

を行く事

いたので決

沢は濁流で

わりにか上

うもない

にのまれて

しかしなが

おりてしま

避けるべき

地図では、

ある。ワ

ないと考え

所釣り橋か

その間ノ

してキス

慢樂は

その間の道

との事であ

する。と

ラフも濡れて使いものにならない筈、いろいろな理由で全面的にコースを変え、B隊、C隊共に中ツル尾根で朝日鉱泉に下る事にした。

これよりS隊は一緒の行動を取り、改めて隊を再編成する。朝日鉱泉への道は二つあり、中ツル尾根と烏原山経由であるが、前者の方が最短コースであり、すぐに森林限界下に入るのて風あたりも少なくなる様に思え、後者だと長い間吹きさらしの尾根すたいをたどり、又遠回りになるので前者を下る事に決めた訳だ。案の定、すぐに植林帯に入り風も弱まってきた。しかし雨は相変らず降り続ける。S隊合同だと20名近くなる為、トランシーバーを持って連絡をとる。尾根は道もはっきりしていて割合スムーズに下れる。10時丁度、尾根をおり、これより沢すたいの道に行く事になる。だがそこにおいて、沢を渡るための釣り橋が流されていたので渡る事ができず、失望する。

沢は湍流であり徒歩する事は無理であり、その釣り橋が流された時のかわりにか上方にワイヤロープ二本を対岸に掛けた、およそ橋とは言えそうもない橋があったので調べてみる。足をすべらせたら沢に落ち、湍流にのまれてしまう危険性がある。

しかしながら、再び来た道をもどる事は、大朝日岳から高低差1200mもありてしまった現状では、メンバーにひどくショックを与えるとの事で避けるべきと判断し、できる限りこのまま続行する様に努める。

地図では、普通ならばこの場から1時間ほどで朝日鉱泉に着けるはずである。ワイヤロープの橋も調べた所、慎重に行動すれば渡れない事もないと考える。ところが、地図を見ると、しばらく行った所にもう一か所釣り橋があり、その現状がどうであるかを調べる為、偵察を出す。その間1年を空身で対岸に渡らせ、2年と3年とで荷を15kg〜20kgにしてキスリング等を運ぶ。

偵察は1時間あまりしてもどり、「釣り橋はしっかりしている。そしてその間の道も沢すたいにおりた所があるが水位が低いので行けそうだ。」との事であった。全員、沢を渡り終えたのは2時頃であり、すぐに出発する。ところが彼ら偵察隊が1時間ほど前に通った頃より増水が激しく、

沢ぞいに降りた所はもう腹までつかるありさまであった。

危険を感じ、ひとまずワイヤーロープの橋の手前までもどる事にした。

その頃はすでに3時を過ぎていた。雨もまだかなり降っている。

しかしながら、谷間の為か風はまったくない。丁度その場には、堅穴住居の骨組みだけが残っている様な作業小屋があった為、その上にテントをかぶせ、セバークの準備にとりかかる。作業を終え、落ち着いた所で丁度雨が止み、夕食の準備を始める。4時半頃より沢の水がひき始め、夕食準備が出来上った頃には、かなりの水がひいていた。

その為、先ほどの場所も容易に通れるのではないかと思い、再び偵察を出す。天気図によると、この先まだ当分天気は回復しそうもないし、下手をすると明日も又この様な状態で動きがとれない様に思える。

又、隊のメンバーの疲労もかなり募っているので偵察隊の報告次第では出発する事に決め、夕食もそこそこにすぐにパッキングにかかる。

18:50偵察隊がもどり、行けるとの事で19:00出発する。もう、あたりはかなり薄暗く足元もおぼつかない状態である。だが先ほど渡れなかった所もなんとなく渡れ、水位は先ほどより50m以上も下っている。全員に懐中電燈を出させ、前の人足場を輝らしてやるようにする。岩場をトラバースする様な所もあったが無事通過し、大丈夫かと思われた釣橋もしっかりしていて安心する。しかし、本流に通ずる支流の徒渉がかなりあり、だいぶ時間を費す。この附近までは偵察隊があらかじめ来ているので、暗くとも状態はわかっていたが、それより先はまだどんな状態かわからず、偵察隊を出して調べさせる。

地図によると、あと20分ほどの距離に朝日鉱泉がある。偵察隊は1時間余りしてもどり、朝日鉱泉を確認してきたと言う。あたりはもう真暗であり、時計は22時を少し回っている。それよりスヘヘ支流の徒渉があり、朝日鉱泉に近くなるにつれて道も整ってきた。22時4分、朝日鉱泉手前の釣り橋にかかる。22時50分、全員無事宿に着く。23時10分、再び激しく雨が降り始め、沢の水位も上昇しはじめた様だ。

宿には空室がなかったので、合い室になる。すぐに風呂に入り、乾い

た服に着
落ちた様

7月

TS

9:00

相変らず

たたまし

を交換し

先に宿を

るが、土

ス時刻の

ので必死

道は自動

らい所も

バスが16

に乗り込

乗りつき

て下車。

る。

8月

TS

6時半

いていな

ただいた

て乗り移

にて米坊

して休養

た服に着換える。全員ホッとしたらしく、ふとんを敷くヒすぐに眠りに落ちた様だ。

7月13日

TS 1:30 白滝 1:20 立木 —— 宮宿 —— 左沢 羽前長崎

7:00起床。暖かいふとんのおかげで疲れがとれたらしい。外では相変わらず雨が降っている。沢の水もかなり増水していて、ゴーゴーとけたたましい音がする。10:00よりC隊といっしょになった装備、食料等を点検し、パツキングにかかる。12:00パツキング完了、C隊より一足先に宿を起つ。本来ならば宿より1時間先の所からバスが出ているのであるが、土砂くずれの為16km先の立木まで歩かねばならない。それもバス時刻の関係上4:00前までに着かないと、その先の予定がかなり狂うので必死になって歩く。

道は自動車道なので別に別題はないが、所々土砂がくずれていて歩きづらい所もある。15:45立木に着き、すぐに現地に電話をかける。

バスが16:00に出発するので、B隊C隊全員無事である事を告げ、バスに乗り込む。宮宿に着くとすぐに山形行のバスが出ているので、これに乗りつぎ左沢駅にて下車する。17:55左沢線に乗り、18:22羽前長崎にて下車。そこより20分ほど歩いた所のリーダーの知人の家にて厄介になる。

8月2日

TS 山形 赤湯 今泉 小国 —— 寺

6時半起床。すぐに出発の準備にかかる。シュラフ等はまだ完全に乾いていないが、平地で眠るにはそう差し支えない様だ。8:40泊めていただいた家をおとにして駅に向う。9:03発の左沢線にて立ち、山形にて乗り換え東北線に乗り赤湯にて下車。再び長井線にて列車に乗り今泉にて米坂線を待ち合わせている所でC隊の者達に会う。彼等も昨日停滞して休養をとっていたとの事であった。

小田にてC隊と別れ、それより再び行動を開始する。前々より朝日岳にて余計に日数を費した場合は、米坂線沿いの道を歩くと言ってあるので、それに従ってコースをとる。その日半ボツ子にて小田町はすれの寺にてテントを張る。

8月13日

T S —— 横根 —— ハッロ —— 鷹ノ巣温泉 (実動4時間4分)

この日より本格的なロードワンとなる。雨は昨日の夕方少しばらついたが、今日は今までにない良い天気となる。道は川に沿って続いているが、溪谷はすごく美しい。だが所々工事中有る為、歩きづらい所がしばしばある。初めのうちは、皆んな元気に行動していたが、しばらく経つと一年の遅れが目立ち始める。

道も舗装してあったり、ジャリ道だったりさまざまである。午前中に鷹ノ巣温泉に着く。結集地の候補にも上っただけあって場所は、すばらしい所である。又キャンプ場は厚土省じをじきに管理しているだけあって長く整っている。そこに管理人からD隊が太石にて今朝までテントを張っていたと教えてくれる。その日の天気により、完全に濡れたものが乾いてしまった。

8月14日

T S —— 下川口 —— 花立 —— 荒島 (実動2時間44分)

この日も天気は良く行動しやすかった。道もずっと舗装されている。鷹ノ巣温泉までは川中も狭まっていたが、それより先からずっと広まり水田もあっちこちに現われる。ペースも順調である。

だが、花立を過ぎてから1年の足どりが悪く、隊編成が乱れ始めた為、荒島にてテントを張る事に決る。テントサイトは交渉の結果、神社におちついた。

8月

T S ——

結集地ま
かった。

ジス操

それから

準備が完

了；PT

集地へと

桃崎浜に

一タイに

だがC隊

だけが残

(B隊反

今回の

日の出来

けで、こ

隊メンバ

後の経験

毎年、夏

宿に限り

この合

雨と言っ

して、主

我々は典

いますの

たまたま

です。そ

8月5日

TS——山口——桃崎浜 (運動/時間30分)

結集地まであと2ピッチもあれば十分なので、あえて起床時間を設けなかった。6:20分頃になり村の子供達がそろそろ神社に集まり始め、ラジオ体操を始めだしたのには驚いた。

それからしばらくゆっくりしていて、11:00から出発の準備にかかり、準備が完了し終えた時になり雨が降り始めたので、出発をしばらく延す。12:00程度、雨が止んだので出発する。坂町の町中を通りぬり、一路結集地へと向う。海に近ずいた為か、磯の香が漂い始めた様だ。

桃崎浜に着いた時、他のパーティはすでに着いており、我々が最後のパーティになった様だ。現地のものも、A隊、B隊皆んな元気で安心する。だがC隊とは台宿の半分近くはいっしょの為、懐しさは感じず、親しみだけが残った。

(B隊反省)

P. L 大 館 康一

今回の台宿を顧みるに、印象として強く残っているのは9月28日～30日の出来事(記録参照)であり、その他の事はただ莫然と浮んでくるだけで、これといって深い印象はありません。僕にとって、いやB隊、C隊メンバー全員にとって、あの日の事は初めての経験であり、そして最後の経験であると思う。又、そうであっていて欲しい。

毎年、夏台宿において多かれ少なかれ怪我をする者が出ているが、今台宿に限り幸いにも1人の怪我人が出なかったと言うのは喜ぶべき事です。

この台宿の反省として、まず上げられる事は場所的な問題、それに梅雨と言う時期的な問題等がありますが、これについては別の項に譲るとして、まず我々の一番みじかな問題としてコースの問題があります。

我々は典型的な朝日岳縦走コースであり道標、道等も割合ハッキリしていますので晴れてさえいれば別に問題のない所と考えます。

たまたま今度の様な集中豪雨に見舞われた為、あの様な事態に陥った訳です。そこで、B隊、C隊とB隊が共に行動した事は、結果的に非常に良

つたように思います。だがこの合宿において一番の失敗であったのは強行下山の避難路としてのコースです。

我々は余りに近道という事を意識しすぎた為、より最短コースという事を考えてしまい、安全性という事がおろそかになった様に思います。

けれども、もちろんそのコースは逃げ道として始めから考えているものであって、平日ならば何事もなく下山できるコースです。その為か地図上において沢を渡っている所が数ヶ所ありましたが、釣橋がかかっているとの事で別に問題にしているませんでした。だが大雨洪水注意報の最中ですので、橋の状態その他を山小屋の管理人に詳しく聞いております。

教訓として感じた事は、今回の様な集中豪雨の中においては沢沿いを歩く事はできる限り避けるべきです。

そして、できる事なら尾根筋に沿って行動する事が懸命であるかと思われます。又、夜中に沢を下った事については、いろいろな皆の意見もある事と思いますが、あれについては僕自身正しい行動であるとは思っておりません。もしあの場において遭難という事態がおきたならば、責められる事は確かです。しかしながら、そのようなメンバー全員疲弊している中で濡れたシュラフで眠り、再び大朝日岳、鳥原山経由であと2日を費して朝日鉱泉に出るという事は、安全ではあるかも知れませんがかなりの無理がある様に思われます。

かと言って我々が行った行動も危険が伴ない、少々冒険的であったのではないかと考えております。けれども、あの時期を逃したら数日間下山できなかったのではないかと考える事を考え、又全員無事下山できたと言う事で、この件は一様保留にしたいと思います。

又、この夏合宿において一番の行動力となるべき2年生が、今回ぜんぜん動けなかった点にも問題があります。さいわい3年生が各パーティ3人づついたので行動には余り支障はさたしませんでした。合宿前における2年生の体力養成という事をもう一度再検討すべきではないでしょうか。次回においては、できる限りの2年生の体力養成というものを突き詰めて考えていきたいものです。

(反省)

例年にな
どっては
の笑顔を
3ヶ月余
あった様
った様で
事は出来
今合宿の
行動にお
多分にあ
たとえ雨
期を待た
りでした。

(反省)

S.L 片山 正則

例年になく集中豪雨に見舞われ、多難な合宿であった。特に一年生にとっては思ひ出多き合宿であった事でしょう。それ故、集結地での各隊の笑顔を見た時の感慨はひとしおだった事と思います。

うヶ月余り経った現在ふり返ってみれば、あまりに余裕のない合宿であった様な気がいたします。各学年、自分に与えられた事は何んとかやった様であるが、学年間の意志疎通また反省を深める。理解するという事は出来なかった様に思えます。

今合宿の忘れぬ思い出であります朝日岳より朝日鉱泉へのその時の行動において私としては、他の場所において、事故の起りうる可能性が多分であり、2時間程で40~50cm 水位が上下が変わるのであるゆえ、たとえ雨が降っても明日必ずやむ時があるのではないか、その時まで時期を待たうと思いました。がしかし全員無事、朝日鉱泉につきなによりでした。